*いの*の
編集後記
拡大版

好奇心と腰の軽さは 20 代 …の 60 才越え姉妹の旅　その 2

「屈しない人たちの力に触れる 二人と一匹＊東北の旅」

ごみ・環境ビジョン 21 運営委員　井上真紀子

前号の編集後記で、東北を旅して大川小学校跡地を訪れたことを書かせていただいたのですが、運営委員から身びいきな高評価をいただき、「写真入りでもっと詳しく書いては」と勧められました。ありがたいことです。

以前（旧ごみっと 115 号）の編集後記拡大版で「福島の旅」を書いたことがあります。その時の同行者である妹と、６月半ばに車で青森県下北半島をスタートして宮城県石巻市まで南下する旅をしました。大川小学校跡地はこの旅の最後に訪れて、衝撃を受けたのでした。

そもそも東北旅行の当初の目的は、下北半島のおいしい海の幸や、恐山観光、岩木山の登山といったごく気楽なものだったのですが、旅の下調べをするうちに、以前から気になっていた３人の「頑固で決して屈しない東北人」がいる場所、いた場所を訪ねたいと思うようになりました。

車というのが小さなキャンピングカーなので、寝泊まりするのは居酒屋の駐車場やキャンカーＯＫの道の駅。さぁ、どこへ行こうか。おばさん２人とトイプードル１匹を乗せた小さなキャンカーが、初夏の東北を走ります！

六ヶ所原燃ＰＲセンター

ふるさとを「最悪のごみ」の最終処分場にさせない！

不屈の人 ひとり目　六ヶ所村の菊川慶子さん

旅の行程をざっと紹介しますと…＜下北半島・佐井村＞→＜仏ヶ浦＞→＜恐山＞→＜六ヶ所村＞→＜北津軽・鶴の舞橋＞→＜岩木山＞→＜宮城県・石巻市＞→＜大川小学校跡＞→＜女川原発＞→＜気仙沼＞ という４日間の旅でした。

２日目の後半、下北半島の付け根にある六ヶ所村に向かいましたが、この日は６月 16 日、六ヶ所村は１週間後に村長選挙を控えていました。

小さな村の村長選挙とはいえ、日本中の核のごみが集まる核燃料サイクル基地＊の村として名を馳せてしまった六ヶ所村の選挙は、いつも特異な様相をみせます。核燃推進・維持派 vs 核燃反対・見直し派の闘いが繰り返され、毎回圧倒的な強さの推進派に反対派が押しつぶされてしまうのです。今回の選挙結果もまさにそうでした。

＊核燃料サイクル基地とは＝① 使用済み核燃料再処理工場
② ウラン濃縮工場 ③ 低レベル放射性廃棄物貯蔵施設
④ 高レベル放射性廃棄物貯蔵管理センター

多くのごみかん会員さんは「核燃料サイクル事業はとっくに破たんしている」ことをご存知だと思います。それでも、六ヶ所村では表立って「核燃なんてもういらない」と言える村民は数えるほどしかいないのです。

北のはずれの六ヶ所村は、戦後になっても食事が満足にとれず、子どもを学校に行かせないほど貧しかった。人並の生活を求めてやむなく核燃施設を受け入れた時から、村と核燃は運命共同体になってしまいました。こうした村と核燃の重い歴史を、私はこの旅の前に、核燃反対派の象徴とも言える菊川慶子さんの著書「六ヶ所村～ふるさとを吹く風」で再認識しました。

①の再処理工場は、工事開始から２兆円以上の経費と 25 年もの歳月を費やしているのに、トラブル続きで完成のメドが立っていません。

④の高レベル放射性廃棄物管理センターに至っては、誘致の際に国は「あくまでも最終処分地が決まるまでの 30 ～ 50 年の一時預かり」と青森県に約束したのに、23 年も経つ今、他に最終処分地が決まる気配すらなく、このまま六ヶ所村が最終処分地になってしまうと言われています。

核燃によって翻弄され、だまされ、分断された六ヶ所村。万が一再処理工場が稼働すれば原発とは比較にならないほどの放射性物質による環境汚染が心配され、再処理ができなければ放射性廃棄物は永遠に六ヶ所村に置かれます。菊川さんはそれを恐れ、人生をかけて反対してきました。

彼女がいたことで六ケ所村の問題はさまざまな人の元に届きました。私が 30 年ほど前に六ヶ所村の問題を知ったのも、菊川さんたちが都内の反原発集会で売っていたチューリップの球根を買ったことから、でした。

菊川さんが主宰する「花とハーブの里」へも立ち寄りましたが、選挙中だったせいかお留守でした。六ヶ所村の問題は原発に依存した私たちの問題。考え続けます！

大川小学校津波被害の教訓を後世に伝える

不屈の人 二人目　大川小学校の只野哲也君

前号のごみっと編集後記で書かせてもらった大川小学校の話を、写真も交えてもう少し詳しくお伝えします。

東日本大震災のとてつもない被害の中でも、石巻市大川小学校の悲劇は、学校の保護下にいた児童が 74 人（教職員10名）も亡くなったことでずっと気になっていました。

特に、被災直後のインタビューで「僕はたった４人生き

残った生徒の１人なので、何があったのかをずっと話していく」と答えた当時小学５年生の只野哲也君の存在が、ずっと心にひっかかっていました。

キャンピングカーの利点は宿泊地をぎりぎりに決められること。３日目は岩木山に登り、今夜の宿泊をどこにしようかと考えた時、せっかくだから、青森を出て宮城県の被災地にしようということになりました。

そして、妹が３年前にも１人で近くまで行きながら、勇気がなくて訪ねられなかった大川小学校（跡地）に、今回は２人だから行ってみたいと言うので、宿泊場所を石巻の道の駅にし、翌朝早くに大川小学校へと向かいました。

川側へ倒された校舎と体育館をつなぐ渡り廊下。津波が校庭で渦を巻いたことがわかる。

大型トラックがひきりなしに行き交う県道沿いに、大川小学校の校舎は、津波の被害に遭ったままの姿で、ありました。県道の反対側は津波が遡上した北上川です。

大川小学校は北上川の河口から 4km 遡った右岸にあり、地震発生から津波に襲われるまで約 50 分の時間がありました。また学校の南東には裏山があります。

「なぜ山に登らなかったのか」というのは誰もが抱く疑問で、それに対してこれまで私が聞いていた報道は「急斜面なので子どもは登れない」「生徒以外にも近所（釜谷地区）の住民が避難していて高齢者も多く、裏山に登るのは無理だった」というものでした。

左の写真がよくニュースなどで映された裏山。法面（のりめん）はコンクリートの壁で上には金網。これを見た限りでは「登れなかっただろうな」と思います。上の方の白い看板が、津波到達地点です。

ところが…下の写真を見てください。丸印が左の写真の位置。ここから矢印のようにわずか 100 mほど、川から離れるように移動すれば、踏み固められたゆるい山道が作られていたのです。ここからなら小さな子どもでもお年寄りでも、難なく裏山に登れます。

この道を見たとたん、涙があふれました。ご遺族はもちろんこの場所を知っているはずです。助かる手だてはあったのです。実際には反対に川に近づくように避難し、子どもたちは津波に飲み込まれたのです。どれだけ悔しく恨めしかったことか。

付き添っていた教師や地域のおとなたちがなぜこんな行動を取ったのかについては、今年４月、只野君のお父さんら一部の遺族が県と市を相手取った裁判で勝訴したこともあり、次第に事実が明らかになってきました。

パソコンをお持ちの方は「止まった刻（とき）　検証・大川小事故」と検索してみてください。河北新報社の大川小取材班が、口を閉ざしがな関係者への粘り強く辛い取材を重ねた末の、渾身の検証記事を読むことができます。

ちょっと気になっていた程度だった大川小津波事故に、私がのめり込んだのも、今年大学生になり、当時の言葉通りに事故を語り継ぐ「語りべ」となった只野哲也君の存在があったからです。

只野君はこの７年間、取材を積極的に受けたり、記憶を継承させるために校舎を遺構として残す運動をしたりすることで、周囲から「目立ちたがり屋」「マスコミにいい顔して」と陰口を叩かれることが多かったそうです。むずかしい年頃だったのに、よく乗り越えてくれたものだ思います。

裁判を闘い、大川小の悲劇を伝承する活動を続ける只野君とお父さんに、これかも注目していきたいと思います。

語りべ活動中の只野君（毎日新聞）

気骨と頑固さがもうひとつの原発事故を防いだ
不屈の人 三人目　女川原発の平井弥之助氏

大川小の次の予定地は、多くの命を救った気仙沼の「日向山」でしたが、その前にちょっと見てみたい場所がありました。牡鹿半島にある東北電力の女川原子力発電所。

過酷事故を起こした福島第一原子力発電所より震源に近く、福島第一原発と同程度の高さ 13 mの津波が襲ったにもかかわらず女川原発が無事だったのは、一人の頑固な技術者のおかげだと聞いたことがあったからです。

女川原発はリアス式海岸に建ち、陸側からではその全容を見ることができませんでしたが、女川原発を過酷事故から救ったのは元東北電力副社長で技術者でもあった平井弥之助氏（故人）という方とわかりました。

1970 年に国に提出された女川原発１号機の原子炉設置申請書では、津波高さの想定値はたった３m。しかし、平井氏は宮城県出身で 869 年の貞観大津波に詳しく、主要設備を 15 mの高台に設けることを強く主張し続けたそうです。

結局、14.8 mの高台に建てられた女川原発は、40 年後の 2011 年３月 11 日の 13 mの津波から逃れられ、３基の原子炉は無事に冷温停止したのです。

帰途の常磐道は、福島原発近くの広大な無人地帯を通ります。原発の怖さも、津波への恐れも知っている頑固な技術者が安全を追求して助けた原発と、「想定外」と恥ずかしげもなく繰り返し、国土と国民をとことん傷つけた原発。とても対照的で、とても示唆に富んでいると思いました。